

## 「総角」巻における『伊勢物語』四十九段引用

竹田 由花子

「キーワード」①「総角」巻 ②『伊勢物語』 ③四十九段 ④匂宮 ⑤絵

### はじめに

物語内の物語絵の中で他作品の引用という行為が起こるとき、草子地や登場人物の発話・心内語の中でその行為が起こる場合と何か違いはあるのだろうか。『源氏物語』第三部「総角」巻にて、匂宮が同母の姉である女一の宮のもとへ訪れる場面がある。そこで女一の宮は数々の絵を眺めており、その中に「在五が物語」、「妹」、「人に琴教へたるところの「人の結ばん」と言ひたる」という内容の物語絵があった。「在五が物語」、「妹」、「人の結ばん」という語句から、その物語絵は『伊勢物語』四十九段を題材に描かれたものだと思われる。『伊勢物語』四十九段は、男主人公が妹に恋の歌を贈るといった内容であり、その絵に触発された匂宮は女一の宮へ「若草の

ねみむものとは思はねどむすほれたる心地こそすれ」という歌を贈り、『伊勢物語』の男と同様に実の女きょうだいに對して好色じみた言動に及ぶのであった。

この場面において長年問題視されてきたことは、現行の『伊勢物語』四十九段には男が妹に琴を教えたという記述がないにもかかわらず、「総角」巻で女一の宮が鑑賞していた物語絵には「妹に琴教へたるころ」が描かれていたことである。先行研究では、「総角」巻の作者が見ていた『伊勢物語』の本文に「琴」や「兄が妹に琴を教える」という本文があったか否かが中心に議論されてきた。また、こういった本文の問題に関わる論考の他に、『うつほ物語』との関連から論じられたものもある。実の女きょうだいへの懸想、「琴を教える」という内容から、同母妹あて宮へ恋心を抱く仲澄の物語との影響関係から論じられたものである。

本稿ではこの問題について、先学を踏まえた上で従来とは違った方法でアプローチを試みる。具体的には、句宮と絵の関係、続編における『伊勢物語』引用の方法を考察した上で、該当場面における『伊勢物語』引用が『源氏物語』の中でどのような位置にいるのかを考え、読みを深めることを目標とする。

### 1、「総角」巻における『伊勢物語』四十九段引用

時雨いたくしてのどやかなる日、女一の宮の御方に参りたまへれば、御前に人多くもさぶらはず、しめやかに、御絵など御覧するほどなり。御几帳ばかり隔てて、御物語聞こえたまふ。限りもなくあてに気高きものから、なよびかにをかしき御けはひを、年ごろ二つなきものに思ひきこえたまひて、またこの御ありさまになずらふ人世にありなむや、冷泉院の姫宮ばかりこそ、御おぼえのほど、内々の御けはひも心にく

く聞こゆれど、うち出でむ方もなく思しわたるに、かの山里人（Ⅱ中の君）は、らうたげにあてなる方の劣りきこゆまじきぞかしなど、まづ思ひ出づるにいと恋しくて、慰めに、御絵どものあまた散りたるを見たまへば、をかしげなる女絵どもの、恋する男の住まひなど描きませ、山里のをかしき家居など、心々に世のありさま描きたるを、よそへらるること多くて、御目とまりたまへば、すこし聞こえたまひてかしこへ奉らむと思す。

（総角⑤三〇三—三〇四頁）

時雨が降りしきるある日、匂宮は同母の姉である女一の宮のもとへやってきた。「のどやかなる日」、「御前に人多くもさぶらはず、しめやかに」とあるように、そこはしんみりとした静かな空間であることが強調されている。そこで女一の宮は絵などを見て過ごしていた。匂宮は、目の前にいる姉の気品に満ちた美しさに魅入りながらも、宇治にいる中の君の美しさを思い出す。また、そこに散りばめられている絵を見ながら、その絵を中の君に差し上げたいとも考える。匂宮は現前にあるもの、つまり女一の宮と物語絵の美しさに魅入りながらも、それらを通して遠くにいる中の君のことを考えているのである。まず、そのことを留意しておきたい。そして、問題となるのは次の場面である。

在五が物語描きて、妹に琴教へたるところの、「人の結ばん」と言ひたるを見て、いかが思すらん、すこし近く参り寄りたまひて、（匂宮）「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならはしてはべりけれ。いとうとうとしくのみもてなさせたまふこそ」と、忍びて聞こえたまへば、いかなる絵にかと思すに、

おし巻き寄せて、御前にさし入れたまへるを、うつぶして御覧する御髪のうちなびきてこぼれ出でたるかたそばばかり、ほのかに見たてまつりたまふが飽かずめでたく、すこしもの隔てたる人と思ひきこえましかばと思すに、忍びがたくて、

(匂宮) 若草のねみむものとは思はねどむすほはれたる心地こそすれ

御前なりつる人々は、この宮をばことに恥ぢきこえて、物の背後に隠れたり。ことしもこそあれ、うたてあやしと思せば、ものものたまはず。ことわりにて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、ざれて憎く思さる。紫の上の、とりわきてこの二ところをばならはしきこえたまひしかば、あまたの御中に、隔てなく思ひかはしきこえたまへり。世になくかしづききこえたまひて、さぶらふ人々も、かたほにすこし飽かぬところあるははしたなげなり。やむごとなき人の御むすめなどいと多かり。御心の移ろひやすきは、めづらしき人々にはかなく語らひつきなどしたまひつつ、かのわたりを思し忘るるをりなきものから、訪れたまはで日ごろ経ぬ。

(総角⑤三〇四—三〇五頁)

女一の宮が見ていた絵の中に「在五が物語」の物語絵があった。『伊勢物語』のことである(1)。「妹」、「人の結ばん」という語から、四十九段を描いたものであると考えられてきた。『伊勢物語』四十九段の全文は次の通りである。(「総角」巻で引用されている部分には傍線を付す。)

むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、

うら若みねよげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ思ふ

と聞えけり。返し、

初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな

(『伊勢物語』四十九段)

「うら若み……」の歌は、男が妹の愛らしいさまを見て「若々しく寝心地がよさそうな若草、その若草のよ  
うなあなたが他の男と契りを結ぶことを惜しく思います」という歌を詠みかけたものである。「ね」には「根」  
と「寝」が掛けられており、「根」、「若草」、「結ぶ」は縁語となつている。それに対する妹の返歌は「あなた  
のことは、きょうだいとしか思っていないかつたのに」という兄の要求を拒否するようなものであるが、章全体  
からは近親恋愛の物語をイメージさせられる<sup>(2)</sup>。傍線を付した「妹」、「人のむすばむ」という語は女一の宮  
の物語絵に描かれていた内容として引用されており、「若草」と「うらなくものを」の語もその直後の場面で  
引用されている。やはり「総角」巻の該当場面で引用されていたのは『伊勢物語』四十九段であると断言でき  
るのだが、ここで問題となる部分がある。それは冒頭でも述べたように、「総角」巻の物語絵には「妹に琴を  
教える」という内容が描かれていたとあるが、現行の『伊勢物語』にはそのような本文はないことである。

ただし、「琴」という語を含む諸本はいくつか存在しており、例として、最福寺本では「いとをかしききん  
をしらへけるをみて」とあり、時頼本では「イトヲカシケナルキムヲシラフトテミラリテ」<sup>(3)</sup>とある。しか  
し、「妹に琴を教える」という本文を有する諸本は現存しない<sup>(4)</sup>。

この問題について今まで様々な議論がされてきた。池田亀鑑<sup>(5)</sup>は、「きんをしふ」とか「きんをしらふ」  
とかある諸本は、源氏物語作者の見た伊勢物語と同系統であったことを、その記事によって証明しているので

ある。(中略) 少くとも時頼本と同系統の本が、寛弘の頃に行はれてゐたことは否定できない事実である」とし、「総角」巻作者が見た『伊勢物語』の本文には「兄が妹に琴を教えた」という本文があったと可能性を述べている。それに対し、福井貞助<sup>(6)</sup>は、「総角」巻の『伊勢物語』は物語絵であるため、作者が見ていた『伊勢物語』の本文に「琴教へたる云々の文章があったというわけではあるまい」と述べている。

また、「総角」巻作者が見ていた『伊勢物語』に「琴」という本文があったか否かとは別な観点から述べられている論稿もある。片桐洋一<sup>(7)</sup>は、時頼本など「琴」という語を含む『伊勢物語』の諸本は、「源氏物語」の総角の巻の記述によって本文を改変したと見るべきだと思ふのである」としている。また、池田和臣<sup>(8)</sup>は、「総角」巻の作者が「本文を正確にはなく誤解を生ずるかたちで引いた可能性を示し、『うつほ物語』の仲澄との関係も交え論じている。

このように、本文の問題については様々な論稿があり、どれも可能性があるものとして考えられるのだが、現時点で定説と言えるものはないようである。「総角」巻の作者が見ていた『伊勢物語』の本文がいかようなものであったか、それを知るのは困難なことであるからだ。

しかし、論者は次にあげる丸山愉佳子の論<sup>(9)</sup>が実に興味深いものであると感じた。丸山は「紫式部のみた『伊勢物語』には「琴」を含む本文があったと考えることや、作者の錯覚による引用という可能性ももちろん否定できない」という前提を置いたうえで、「総角」巻の該当場面は匂宮と女一の宮との関係を「姉弟をこえた男女の雰囲気になる事をあらわすために、「琴」の語をあえて挿入」した、つまり「現行の『伊勢物語』にはない本文を作者が意識的に改変したとは考えられないだろうか」と述べている。丸山の論に従うのであれば、「琴」には、きょうだい間の近親恋愛を読者にイメージさせる効果があるということになる。それは、『うつほ物語』

の仲澄の物語から付与されるものであろう。次節以降では、仲澄の例と、同じく「琴を教える」ことが女に近づく例として使われている玉鬘十帖の例を見てみる。

## 2、「琴を教える」という口実①仲澄の場合

『うつほ物語』は日本文学史上初の長編物語であり、『源氏物語』へ影響を与えている。例として、『源氏物語』正編「総合」巻には『うつほ物語』の物語絵が登場する場面がある<sup>(10)</sup>。その『うつほ物語』の登場人物である仲澄は、妹あて宮へ懸想し求婚までするのだが、彼女は東宮へ入内したためその恋心は叶わずに終わる。そして、そのショックにより最後は死をとげる。この仲澄という男は、物語の中でたびたび、琴を教えることを口実に妹あて宮へ近づこうとする。

また、かくて、夕暮れに雨うち降りたる頃、中島に、水の溜りに、鴉といふ鳥の、心すごく鳴きたるを聞きたまひて、侍従、あて宮の御方におはして、かく聞こえ給ふ。

(仲澄)「池水に玉藻沈むは鴉鳥の思ひあまれる涙なりけり

とは御覧ずや」と聞こえ給へば、あやしう思して、いらへ聞こえ給はず。この侍従も、あやしき戯れ人にて、よろづの人の、「婿になり給へ」と、をさをさ聞こえ給へども、さもものし給はず、「この同じ腹にもものし給ふあて宮に聞こえつかむ」と思せど、あるまじきことなれば、ただ、御琴を習はし奉り給ふついでに、遊びなんどし給ひて、こなたにのみなむ、常にものし給ひける。

(藤原の君、七八頁)

「総角」巻の該当場面と同じく雨が降っている時分、仲澄は「琴を教える」ことを口実に同母の妹あて宮へ近づく。匂宮と女一の宮が「弟と姉」という関係であるのに対し、こちらは「兄と妹」という関係であるが、異性間のきょうだいであることに変わりはない。この場面と同じように、仲澄が「琴を教える」ことを口実にあて宮に接近を試みる場面は複数ある。

孫の、たてきといふを呼びて、「姫君は、いづくにかおはします」。たてき、「侍従の君と、御琴遊ばす」。

(藤原の君、九七頁)

侍従の君、御琴遊ばすついでに、

人を思ふ心いくらに砕くれば多く忍ぶになほ言はるらむ

例の聞き入れ給はず。

(藤原の君、一〇二頁)

「何かは、知り給へれば。まだ小さかりし時、箏の琴習はしし頃なむ、あやしく、思はぬやうなる気色なむ見えし。……(中略)」

(蔵開・上、五一四頁)

室城秀之<sup>(1)</sup>は、最福寺本・時頼本『伊勢物語』と「総角」巻の該当場面が「琴を弾いている妹に歌を詠

みかける」という状況において一致し、それらと『うつほ物語』の仲澄も同じような状況であるため「『うつほ物語』が見ていた『伊勢物語』が、現在の流布本の『伊勢物語』と同じものだという保証はないのである」と述べている。

同じく『うつほ物語』の仲澄と関連づけた論として、勝亦志織<sup>(12)</sup>は、「総角」巻の該場面について「『伊勢物語』の近親恋愛はもとより、『うつほ物語』の近親恋愛も引用されてきて」おり、それにより「匂宮と女一宮の危うい関係構造を創り出そうとしている」と述べている。つまり、「総角」巻の該場面は、『伊勢物語』四十九段と『うつほ物語』の両方から引用されたのだと論じている。近藤さやか<sup>(13)</sup>は勝亦の論に従い、「総角」巻では『伊勢物語』を絵にしたときに『うつほ物語』の仲澄の物語が取り込まれたとし、その際、「琴」と「音」という聴覚要素を「絵」という視覚要素の中に閉じ込めて描く点から、『うつほ物語』の引用を『伊勢物語』と同レベルで表現しようとし、ない『源氏物語』の態度が見てとれようか」としている。

『源氏物語』の中で『うつほ物語』を踏まえていると考えられる部分は多々あるため、「総角」巻の作者も『うつほ物語』を読んでいたと考えられる。そのため、きょうだい間の近親恋愛に「琴を教える」という行為が付加される「総角」巻の該場面には、勝亦らが述べるように『伊勢物語』四十九段だけではなく『うつほ物語』の仲澄も引用されているのである。「総角」巻の該場面には大きな異同はないため、そのように考える方が妥当であろう。

しかし、そうなると一つ疑問が浮上してくる。「総角」巻の該場面では『伊勢物語』と『うつほ物語』二つの物語が引用されているわけだが、『伊勢物語』の方は「在五が物語」や「人の結ばん」といった語により『伊勢物語』四十九段が引用されていることが読者に対して明白にわかるような引用をしているのに対し、『うつ

『ほ物語』の方は兄と妹の近親恋愛の場と「琴を教える」という内容が一致するのみであり、『伊勢物語』と比べるとそれが『うつほ物語』の引用であることがわかりにくい引用の方法となっている<sup>(14)</sup>。『源氏物語』において、『伊勢物語』と『うつほ物語』では引用のレベルが異なるのだろうか<sup>(15)</sup>。もしくは、該当場面では『うつほ物語』の引用であることは曖昧にする必要があったのだろうか。

### 3、「琴を教える」という口実①玉鬘十帖の場合

『源氏物語』正編では、光源氏が養女玉鬘に接近を試みる場面にて、仲澄の物語と同様に「琴を教える」ことが口実として使われている。参考としてこちらも見よう。

渡りたまふことも、あまりうちしきり、人の見たてまつり咎むべきほどは、心の鬼に思しとどめて、さるべきことをし出でて、御文の通はぬをりなし。ただこの御事のみ、明け暮れ御心にはかかりたり。なぞ、かくあいなきわざをして、やすからぬもの思ひをすらむ、さ思はじとて、心のままにもあらば、世の人の譏り言はむことの軽々しさ、わがためをばさるものにて、この人の御ためいとほしかるべし、限りなき心ざしといふとも、春の上の御おほえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるまじく思し知りたり。(中略)宮、大将などにやゆるしてまし、さてもて離れ、いざなひ取りてば、思ひも絶えなんや、言ふかひなきにて、さもしてむ、と思すをりもあり。されど渡りたまひて、御容貌を見たまひ、今は御琴教へたてまつりたまふにさへことつけて、近やかに馴れ寄りたまふ。

(常夏③二三四—二三五頁)

光源氏は、玉鬘を妾にしたいという思いと、その欲望を自制する心との間で揺れ動く。玉鬘の近くにいたい光源氏は彼女のいる西の対に幾度となく訪れるのだが、人目が気になり躊躇する。そのため、何か口実をつけては玉鬘に手紙を送る。しかし、手紙のやり取りだけでは物足りなかつたようで、二つ目の傍線部では「琴を教えること」を口実に彼女の近くに寄り添うのであつた。

この部分においても『うつほ物語』の仲澄がイメージされていた可能性が高い。もしくは、『源氏物語』が執筆された当時『うつほ物語』の影響によって「琴を教える」ことは男が近親者の女に近づく手段であるというイメージが定着してしまつたのかも知れない。いずれにしても、この部分においても仲澄の影響が少なからずあると言つていいだろう。

また、玉鬘の物語と本論について考えるとき、次にあげる「胡蝶」巻も見てみたい。

またの朝、御文とくあり。なやましがりて臥したまへれど、人々御硯などまゐりて、「御返り疾く」と聞こゆれば、しぶしぶに見たまふ。白き紙の、うはべはおいらかに、すくすくしきに、いとめでたう書いたまへり。(源氏)「たぐひなかりし御気色こそ。つらきしも忘れがたう。いかに人見たてまつりけむ。

うちとけてねもみぬものを若草のことあり顔にむすばほるらむ

幼くこそものしたまひけれ」と、さすがに親がりたる御言葉も、いと憎しと見たまひて、御返り事聞こえざらむも、人目あやしければ、ふくよかなる陸奥国紙に、ただ、(玉鬘)「承りぬ。乱り心地のあしうはべれば、聞こえさせぬ」とのみあるに、かやうの気色はさすがにすくよかなりとほほ笑みて、恨みどころあ

る心地したまふも、うたてある心かな。

(胡蝶③一九〇—一九二頁)

父親分だと思っていた光源氏から慕情を告白されるという、玉鬘にとつては不愉快極まりない出来事があった日の翌朝の場面である。光源氏から玉鬘のもとに手紙が届いたのだが、彼女はその手紙を読むことをためらう。しかし、付近に仕えている女房たちの目もあるため、しぶしぶ手紙に目を通す。その手紙は「白き紙」に書かれており恋文の形態とは異なるが、書かれている内容は光源氏が玉鬘を養女ではなく女として見ているような内容であった。

傍線を付した和歌では玉鬘が喩えられた「若草」や「ねもみぬ」、「むすほほる」といった語があり、これは『伊勢物語』四十九段を踏まえたかのような歌となっていることが諸注釈などで指摘されている。この時の光源氏と玉鬘は義理とはいえ親子関係、つまり近親関係にあり、また、その手紙を読んだ玉鬘が「いと憎し」と反応していることから、男の方は近親者である女に言い寄るも女の方はその思いを拒否しているという構図が『伊勢物語』四十九段と一致する。

このように、玉鬘十帖においても『うつほ物語』仲澄と『伊勢物語』四十九段が引用されている可能性が高い。そしてここでも、『伊勢物語』の方は引用されていることが顕在化されるような引用の方法となっているが、『うつほ物語』の方は潜在化された引用となっていると言える。

以上が、他の物語における「琴を教える」ことを口実に男が女に接近を試みる例である。『うつほ物語』仲澄の物語で確立された近親者の女への恋慕と、その女に接近を試みる口実に「琴を教える」ことが使われる方法は、玉鬘の物語へも受け継がれた。その玉鬘の物語には『伊勢物語』四十九段が明らかに引用されている部

分があるわけだが、ここでは同章段を下敷きにしつつ、光源氏の執心とそれを厭う玉鬘の心情が細かく語られている。また、『伊勢物語』四十九段は兄と妹という関係であつたが、玉鬘の方は義理の父と娘という関係であるという差異もある。

一方、「総角」巻の「在五が物語」の物語絵が出てくる場面はというと、匂宮と女一の宮は異性間のきょうだいであり、人物間の関係は玉鬘の物語より『伊勢物語』四十九段と一致する。しかし、女一の宮は匂宮の誘いをするりとかわし、匂宮もしつこく迫らないことから、該当場面では『伊勢物語』四十九段を引用しつつも、玉鬘の物語にあつたような近親恋愛が起る予感や緊張感は存在しないと見えよう。

そもそも、該当場面の匂宮は宇治へ行けない日が続き煩悶とすゝ中で、いわば暇つぶしも兼ねて姉のもとへ来たのである。その証拠に、冒頭で見た場面では、匂宮は目の前にいる女一の宮とそこに散らばっている様々な絵を注視しながらも、それらを通して宇治にいる中の君のことを考えていた。匂宮は本気で女一の宮に迫ろうとしているわけではないのである。

つまり、この場面では『伊勢物語』四十九段を引用しつつも、匂宮と女一の宮の間に近親恋愛が起る緊張感も存在しないのである。言い換えれば、近親恋愛が題材となっている『伊勢物語』四十九段をパロディ化した小話のような場面なのである。そもそも、「在五が物語」と作品名をはっきりと提示している時点で、『伊勢物語』を本質的に引用するつもりなどないのである。

その証拠に、若き日の光源氏が活躍する第一部では、地の文や光源氏以外の登場人物の発話部分などにおいて『伊勢物語』が引用されることで、男主人公光源氏に『伊勢物語』の昔男のイメージが投影されていた。『伊勢物語』が引用されていることは潜在化されており、それでも当時の読者からすれば、光源氏に昔男のような

好色な男主人公の形態が付与されていることがわかるのである。

本論で問題とした『伊勢物語』四十九段は、「若紫」巻でも引用されている。それを、第一部の『伊勢物語』引用の例として見てみよう。

(尼君) 生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき

またるたる大人、「げに」とうち泣きて、

初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ

(若紫①二〇八頁)

(源氏) 「げに、うちつけなりとおほめきたまはむもことわりなれど、

初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ

と聞こえたまひてむや」とのたまふ。

(若紫①二一六頁)

三者の和歌の中で、若紫が「若草」、「初草」に喩えられており、そこには『伊勢物語』四十九段が投影されていることが指摘されている。「総角」巻のように『伊勢物語』を指す作品名は示されていないが、『伊勢物語』を読んだことのある読者からすれば、幼い女が「若草」「初草」に喩えられている和歌が繰り返されることによつて『伊勢物語』四十九段が想起される。それにより、今後起こる展開、つまり若紫と光源氏の近親者のような関係になり、その後男女の関係になるという展開を予想させるような引用の方法なのである<sup>(16)</sup>。

比較材料として、第二部において活躍する柏木の『伊勢物語』引用についても言及しておく。柏木は『伊勢

物語』の世界に陶醉する人物として設定されており、彼自身の発話・心内語の中で『伊勢物語』の語句が引用されていることが、神田龍身により指摘されている<sup>(17)</sup>。それらはどれも『伊勢物語』を引用したことが明らかであり、顕在化された引用なのである。しかし、柏木は昔男や光源氏のように物語の男主人公格にはなれない。長年思慕し続けた女三の宮にあっさり振られ、死んでしまう。『伊勢物語』の中で恋の病により死ぬ男は登場しないため、この結末は昔男とは被らない。

自らの発話・心内語の中で『伊勢物語』の語句を引用しなくとも昔男のような男主人公として確立されていく光源氏、『伊勢物語』の男主人公に成りきろうとするも周囲からはそのように認知されない柏木。やはり、『源氏物語』の中で『伊勢物語』が引用される時、それが『伊勢物語』の引用であることが直ぐには分からないように、潜在的に引用されるときこそが、本質的な『伊勢物語』引用なのである。

以上のことから「総角」巻における『伊勢物語』四十九段引用を考えると、ここは『伊勢物語』を引用していることが非常に顕在化されており、本質的な引用からは程遠いものだとと言える。第一部・光源氏の物語のように、『伊勢物語』を下敷きにすることによって物語読者に緊張感を与えるような展開にするつもりなど毛頭ないことがわかる。また匂宮は、第二部における柏木のように、昔男に「成り損なう」人物としても設定されていない。該当場面における『伊勢物語』四十九段引用は、言わば「お遊び」のような『伊勢物語』引用なのである。

4、匂宮と絵——表出される欲望——

「総角」巻には『伊勢物語』の物語絵があつたわけだが、匂宮にとつて絵とはどのような意味を持つものなのだろうか。最後に、匂宮と絵の関係について考察をし、本稿の結論を導き出したい。第三部の主人公である薫と匂宮は、様々な面に対極する人物として設定されているが、各々が興味を持つ対象も異なる。薫が「音楽」に深く関心を寄せるのに対し、匂宮は「絵」を好む。「総角」巻では『伊勢物語』の物語絵を女一の宮へ近づぐ手段として使用していたが、浮舟と関わる場面でも絵が使われている。この「絵」は、匂宮にとつてどのような意味を持つものなのだろうか。「浮舟」巻の三例を見てみよう。

まずは、匂宮が自ら絵を描いて浮舟に渡す場面である。

硯ひき寄せて、手習などしたまふ。いとをかしげに書きすさび、絵などを見どころ多く描きたまへれば、若き心地には、思ひも移りぬべし。(匂宮)「心よりほかに、え見ざらむほどは、これを見たまへよ」とて、いとをかしげなる男女もろともに添ひ臥したる絵を描きたまひて、(匂宮)「常にかくてあらばや」などのたまふも、涙落ちぬ。

(匂宮)「長き世を頼めてもなほかなしきはただ明日知らぬ命なりけり

いとかう思ふこそゆゆしけれ。心に身をもさらにえまかせず、よろづにたばかりらむほど、まことに死ぬべくなむおぼゆる。つらかりし御ありさまを、なかなか何に尋ね出でけむ」などのたまふ。

(浮舟⑥)一三二—一三三頁)

匂宮が描いた絵は「いとをかしげなる男女もろともに添ひ臥したる絵」であった。そして、その絵を浮舟に見せ、「常にかくてあらばや」と言う。つまり匂宮は、仲睦まじく添い寝をしている美しい男女の絵を描き、自分たちも絵の中の二人のようにいつも寄り添っていたと言ったのであり、それは絵の中に自らの欲望を表出させたのだと言える。

そして、この絵はこの後の場面でも登場する。

雨降りやまで、日ごろ多くなるころ、いとど山路思し絶えてわりなく思されければ、親のかふこはとこそきものにごそと思すもかたじけなし。

(中略)

宮の描きたまへりし絵を、時々見て泣かれけり。ながらへてあるまじきことぞと、とぎまかうぎまに思ひなせど、ほかに絶えこもりてやみなむはいとあはれにおほゆべし。

(浮舟)「かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身をもなさばや

まじりなば」と聞こえたるを、宮はよよと泣かれたまふ。さりとて、恋しと思ふらむかしと思しやるにも、もの思ひてゐたらむさまのみ面影に見えたまふ。

(浮舟⑥一五七—一六〇頁)

つらい日々が続く中、浮舟は匂宮から貰った絵を度々見では泣いていた。このまま薫に引き取られ、匂宮との縁が薄くなるかと考えると、とても切ない気持ちになる。浮舟は自らの気持ちを慰めるために、匂宮が描いた

絵を見ていたのである。

さらに、浮舟は失踪する直前にもこの絵を携えている。

右近は、言ひ切りつるよし言ひぬたるに、君は、いよいよ思ひ乱ること多くて臥したまへるに、入り来てありつるさま語るに、答へもせねど、枕のやうやう浮きぬるを、かつはいかに見るらむとつつまし。つとめても、あやしからむまみを思へば、無期に臥したり。ものはかなげに帯などして経読む。親に先立ちなむ罪失ひたまへとのみ思ふ。ありし絵を取り出でて見て、描きたまひし手つき、顔のほひなどの向かひきこえたらむやうにおぼゆれば、昨夜一言をだに聞こえずなりにしは、なほいま一重まさりていみじと思ふ。かの、心のどかなるさまにて見むと、行く末遠かるべきことをたまひわたる人もいかが思さむといとほし。

(浮舟⑥一九二—一九三頁)

この時の浮舟は「親に先立ちなむ罪失ひたまへとのみ思ふ」とあるように、既に死を決意している。経などを読みながら死へ向かう準備をするが、その時、匂宮から貰った例の絵を取り出す。そして、その絵を描いていたときの匂宮の手つきや顔の美しさを思い出し、昨晩ただの一言さえも言葉をかけなかったことを悔やみ、再び切ない気持ちになる。ここで注意しておきたいことは、この場面における浮舟は絵を通してそれを描いていた時の匂宮の身体を思い浮かべているということだ。

以上が、匂宮が浮舟に宛てて描いた絵が出てくる場面である。この後、この絵がどうなったのかは明記されていない。しかし、浮舟がこの絵を見ることで自身の心を慰め、拠りどころにしていたことは明白であり、失

踪する際も懐に入れて持っていた可能性は高い<sup>(18)</sup>。

以上が、「浮舟」巻において匂宮が浮舟に手渡した絵がでてくる場面である。匂宮にとって絵は、単に関心を寄せるものではなく、女に対する自らの欲望を表出させたものであり、それを意中の女に手渡すことで、その欲望を相手へ共有させるものである。また、女に近づく道具としても機能している。浮舟に手渡した絵は、匂宮が自らの手で描くという身体的行為が施されたものであるため、その効力がより強くなっているといえよう。それは、失踪直前の場面にて浮舟がその絵を通して絵を描いていた時の匂宮の手つきを思い出していたことから分かる。

この浮舟に手渡した男女が寄り添う絵と、「総角」巻における「在五が物語」の物語絵を比較してみたい。まず共通点としては、どちらも男女の恋愛要素を含む場面が描かれており、匂宮がそれを女に近づく手段としていることがあげられる。また、「総角」巻の絵は、匂宮の発話部分にて、女一の宮と「その絵に描かれている兄妹のような隔てのない仲になりたい」とあることから、こちらも浮舟に手渡した絵と同様に、絵の中に匂宮の女へ対する欲望が表出されていると言える。

しかし、両者には差異もある。浮舟に手渡した絵の方は匂宮自身が描いたものであるのに対し、「総角」巻の方は女一の宮の所有物であり、匂宮が描いたものではない。また、浮舟は絵に描かれた匂宮の欲望を受け入れたのに対し、女一の宮は拒絶している。つまり、絵を受け取った側の反応が異なっているのである。

そして、浮舟と女一の宮、双方の女の反応の違いは次にあげる二点によるものだと考えられる。まず、先述したように、浮舟に手渡した方の絵は匂宮の手で描くという身体的行為が施されているため、自らの欲望を女にも共有させる効力が高まっているのではないだろうか。二点目は、鄙びた地で育った浮舟にとって絵はめず

らしいものであったため、匂宮から見せられた美しい絵に魅了されてしまったのだが、都で育った女一の宮にとつて絵は幼いころから見慣れているものであったと推測できるため、それにより口説き落とされることはなかったのではないだろうか<sup>(19)</sup>。

匂宮の欲望が表出された「絵」は、東国育ちの浮舟という女の心を支配する道具として機能しているのである。

## 5、おわりに

「総角」巻における『伊勢物語』四十九段引用の特異性は、登場人物の発話部分だけではなく、物語内の物語絵の中で『伊勢物語』が引用されていることである。先行研究では、現行の『伊勢物語』四十九段には兄が妹に「琴を教えた」という本文を有するものがないにもかかわらず、「総角」巻の物語絵には「妹に琴教へたところ」が描かれていたとあることから、「総角」巻の作者が見ていた『伊勢物語』にはそのような本文があったか否かが中心に議論されてきた。本稿ではこの問題について、「総角」巻の作者が見ていた『伊勢物語』には「琴を教えた」という本文はなかったという論に同調し、勝亦・近藤らが指摘するように、「妹に琴教へたところ」という部分は『うつほ物語』の仲澄から付与されたものであると考える。

また、匂宮にとつて絵とは、女に対する自己の欲望を表出させたものである。それは浮舟に贈与した絵の例を見ると如実に表れている。その絵には美しい男女が寄り添う様が描かれており、匂宮はその絵を指して「自分たちも常にこうしていたい」と言っているからだ。その後、浮舟がその絵を大切に持っており、失踪した際もその絵を携帯していたと考えられることから、浮舟は絵に込められた匂宮の欲望を受け入れた女である

と考えられる。

また、匂宮の欲望が込められた絵は、彼が意中の女へ近づく道具としても機能している。浮舟に渡した絵は、匂宮自身が考えた理想の男女の構図であることや、自らの手で描くという身体的行為が施されていることから、彼の欲望がより強く込められていると考えられる。匂宮はそれを使い、浮舟に接近するとともに、彼女の心を支配していったのである。

それに対し、「総角」巻における『伊勢物語』の物語絵は、匂宮が自身の手で描くという身体的行為は施されておらず、彼の所有物でもない。この絵は、匂宮が他人の描いた絵に自己の欲望を便乗させただけであって、彼自身の欲望をそのまま表出させたものではないのである。そのため、女一の宮に対しては絵を使って接近することは叶わなかった。匂宮は、他人が描き所有する絵を以って女に近づき支配することは不可能だったのである。

また、『源氏物語』第一部で同じく『伊勢物語』四十九段が引用されている「胡蝶」、「若紫」巻と比べてみると、「総角」巻における四十九段引用の特異性が見えてくる。「胡蝶」、「若紫」巻では、光源氏と女君の関係が近親者のような関係であることに加え、登場人物の和歌の中で「若草」、「初草」という歌語を使用することにより、読者に『伊勢物語』四十九段を想起させるという方法で『伊勢物語』四十九段の引用が行われていた。『伊勢物語』四十九段を引用したことが読者にはっきりとはわからないような、潜在化された引用の方法である。

それに対し「総角」巻の方は、「在五が物語」という語により『伊勢物語』を引用することをはっきりと示した上で、「妹」「人の結ばん」「若草」「うらなくものを」などという四十九段の語を引用している。「胡蝶」、「若紫」巻と比べると、『伊勢物語』四十九段を引用したことがより顕在化されているのである。

『源氏物語』における『伊勢物語』引用は、引用されていることが潜在化されるとき程、より本質的な引用がされていると考えられる。本質的な引用とは、引用した方の物語の中で、引用された方の物語が基盤として強く機能していることである論者は考える。

「総角」巻の『伊勢物語』四十九段引用は、匂宮と女一の宮という異性のきょうだいが同じ空間にいる中で、きょうだい間の近親恋愛が語られる『伊勢物語』四十九段を引用することで、匂宮と女一の宮の間に恋愛関係が発生するかのように見せかけているが、実際にそのような展開にはならない。該当場面では、「在五が物語」という『伊勢物語』を表す書名が明示されていることから、『源氏物語』の中で『伊勢物語』が引用されている部分の中で、最も『伊勢物語』が引用されていることが顕在化されている部分であると言える。そして、『源氏物語』における『伊勢物語』引用の特徴を鑑みると、ここは本質的な引用からは最も離れた方法で『伊勢物語』の引用がされている場面なのである。

そもそもこの場面の匂宮は、本気で女一の宮に接近をしているわけではない。それは、直前の場面に匂宮が宇治へ行けない日が続いていたとあることや、匂宮が現前にある女一の宮と絵に魅入りながらも宇治にいる中の君を思い出していたことから判断できる。

「総角」巻における『伊勢物語』引用は、『源氏物語』の中で最も顕在的に『伊勢物語』が引用された場面であり、第一部光源氏の物語において使われた本質的な『伊勢物語』引用とは程遠いものなのである。

『源氏物語』、『伊勢物語』の本文は小学館の新編日本古典文学全集に、『うつほ物語』の本文はおうふうの『うつほ物語 全 改訂版』による。

注

(1) 『源氏物語』正編「総合」巻にも『伊勢物語』の絵が出てくる場面がある。「伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらす」(総合②三八一頁)とあり、これが『伊勢物語』という作品名の初出である。また、この部分の直後に『伊勢物語』の男主人公を「業平」、「在五中将」と表記していることから、「総角」巻にある「在五が物語」も『伊勢物語』のことを指していると考えていいだろう。また、『源氏物語』以降の作品になるが『狭衣物語』には『伊勢物語』が「在五中将の日記」と表記されている。

(2) 『伊勢物語』四十九段の解釈について、古注釈では、「常二ハ、業平ノ妹ヲ、ケサウシテ、ヨムトイヘドモ、シカラス。妹ヲ不便ニ思テ、憐愍ノ心ニテイヘル也」(『惟清抄』)、「いもうとを不便に思ひて、憐愍にていへる也」(『闕疑抄』)などがある。現代の注釈書では、例として、新編日本古典文学全集(福井貞助校注・小学館)では「本段は昔ありける男の心情を語る小話として、佳品をなしている。二首の歌は軽い気持ちの応酬と見るべきものであろう」としている。新潮日本古典集成(渡辺実校注・新潮社)には「兄が妹に性的魅力を感じ、妹がはじめて兄の異性であることを意識する話、と見ておく」とある。なお、『伊勢物語』の男主人公のモデルである在原業平に妹(同腹・異腹いづれも)がいたという史実はない。

(3) 池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』(大岡山書店・一九三三年)

(4) 古注釈で「琴」を含むものとしては「冷泉家流伊勢物語抄」があり、「きんをしらべとは、琴也」とある。しかし、ここでもやはり兄が妹に琴を「教えた」という内容ではない。

(5) 池田亀鑑『源氏物語大成第十二冊 研究篇』(中央公論社・一九八五年)

(6) 福井貞助『伊勢物語生成論』(有精堂・一九六五年)

(7) 片桐洋一『伊勢物語大和物語』(鑑賞日本古典文学)(角川書店・一九七五年)

- (8) 池田和臣「源氏物語の引用表現における異文——引用本文の行方、引用表現の含意——」(『論叢 源氏物語4 本文と表現』新典社・二〇〇二年)
- (9) 丸山愉佳子「異同をどう読むか」(『源氏物語の鑑賞と基礎知識』二九・至文堂・二〇〇三年)
- (10) 「絵合」巻の例は次の通りである。
- まつ、物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合はせて争う。(中略)「俊蔭は、はげしき浪風おほほれ 知らぬ国に放たれしかど、なほさして行きける方の心ざしもかなひて、つひに他の朝廷にもわが国にもありがたき才のほどを弘め、名を残しける古き心をいふに、絵のさまざま唐土と日本とをとり並べて、おもしろきことどもなほ並びなし」と言ふ。  
(『絵合』三八〇—三八一頁)
- 斎宮の女御(梅壺の女御)ら左方が「竹取物語」の物語絵を出したのに対し、弘徽殿女御らがいる右方が出した物語絵が「うつほ物語」である。
- (11) 室城秀之「伊勢物語」と「うつほ物語」(山本登朗編『伊勢物語 虚構の成立』竹林舎・二〇〇八年)
- (12) 勝亦志織「物語の〈皇女〉——もうひとつの王朝物語史」第一章第二節・笠間書院・二〇一〇年
- (13) 近藤さやか「伊勢物語」における音楽」(『学習院大学人文科学論集』第一九号・二〇一〇年一〇月)
- (14) 勝亦は、前掲注意12にて、「仲澄のことが直接的に引用されているわけではない」「『うつほ物語』を知っている読者からすれば、「妹に琴を教える兄」という造形に仲澄を思い起こす可能性は低くないだろう」と述べている。
- (15) 近藤は、前掲注13にて、「実際にあった「絵」を前提としているよりは、「琴」と「音」という聴覚要素を「絵」という視覚要素の中に閉じ込めて描く点から、「うつほ物語」の引用を『伊勢物語』と同レベルで表現しようとする「源氏物語」の態度が見て取れようか」と指摘している。
- (16) 「若紫」巻は、賀茂真淵の「伊勢物語新釈」にて、その巻名が「伊勢物語」初段によるものとされており、それは現在ではほぼ定説となっている。これを受けて三谷邦明は、「若紫」巻冒頭には「伊勢物語」初段と対応する部分が多々あることを指摘した上で、「伊勢物語四十九段を典拠にした和歌が記され、初段と四十九段が結鎖し兄弟の近親相姦的な〈罪〉が物語を覆い、それは伊勢物語で描かれてきた二条后や斎宮との禁忌の恋を喚起することに「なる」と述べている(『藤壺物語の表現構造——若紫巻の方法あるいは「前本文」としての伊勢物語

- 」〔『物語文学の方法Ⅱ』・有精堂・一九八九年〕／初出『物語・日記文学とその周辺』一九八〇年九月〕。
- (17) 神田龍身「『源氏物語』第二部論序章——編年的時間認識と書くことの論理の抬頭」〔『国語と国文学』第八十六巻第五号・二〇〇九年五月〕
- (18) 葛綿正一「絵をめぐる——主題と変奏」〔『源氏物語のエククリチュール——記号と歴史』笠間書院・二〇〇六年〕／初出「音楽と絵、人形と絵——宇治十帖論のために」〔『水鳥』一・一九八八年八月〕。改訂して「絵をめぐる——源氏物語の主題論的分析」〔沖縄国際大学日本語日本文学研究』六・二〇〇〇年六月〕。
- (19) 川名淳子は、浮舟について、「紫の上や玉鬘と同じように鄙の地から登場し、高貴な男に愛された」という点が「極めて「物語的」な女であった」としている。「物語絵の女——〈絵を見る心〉の発動と物語の表現」『物語世界における絵画的領域 平安文学の表現方法』二〇〇五年十二月／初出「物語絵の女——源氏物語の表現から」『国文学』学燈社・一九九八年五月〕

付記

本稿は、物語研究会・二〇一六年度一月例会（於立正大学）における口頭発表に基づく。ご意見・ご教示くださった皆様には心より御礼申し上げます。

The quotation from “Isemonogatari” chapter 49 in Chapter “Agemaki”

TAKEDA, Yukako

It's considered about the quotation from “Isemonogatari” Chapter 49 in Chapter “Agemaki” by the main subject. “Isemonogatari” chapter 49 are the story which makes closely related love remember. This is quoted in the situation Nionomiya is close to Onnaichinomiya his elder sister. There are second singularities of the “Isemonogatari” quotation . The first, other works are quoted in the story picture in the story. Nionomiya approaches Onnaichinomiya his elder sister, make it agency. The second, the book that she was seeing and the present book of “Isemonogatari”. In a book of “Isemonogatari” that she was seeing, a man tells a koto to my younger sister. but the present book of “Isemonogatari” aren't included the contents. In this thesis, considered about the problem and the sequel of “genjimonogatari”.

(日本語日本文学専攻 博士後期課程三年)